

福沢諭吉先生 殿

拝啓

天におわします先生に一筆謹んで御報告申し上げます。

過ぐる年、慶應義塾創立一五〇年の節目に臨みまして、私共は御著『西洋事情』を最新の情報技術を用いて復刻出版いたしました。国際的に多くの方々
の御協力・賛同を得た上、とくに先生の曾孫さんに当たる福沢武君（執筆当時・慶應義塾評議員会議長・三菱地所株式会社第五代社長を経て現在同社相談役）が「新序文」を寄せられ、持説の「第三の日本開国こと始め」を草してくださいました。感激至極です。むろん、第一回は先生が明治維新前後に火をつけた一貫した開国論です。先生はご存知ないと思いますが、日本は大きな戦いに敗れ「敗戦開国期」という妙な時代がありました。これが、忘れもしない、教訓の深かった筈の第二の日本開国でございます。第三の開国とは、グローバリゼーションの波の中にあつて、一國独立を超えて世界の平和、人類の幸福のために先導者の役割を果たす気概を持つ時代ということになります。これは、二十一世紀の目標の一大柱となりましょう。日本人は、往年の先生の勇氣に再度学ぼうとしております。国内にあつては、上州人として勝負したい。国を出たからには日本人として勝負したい。国際人を志向したい、と。新編には、小生も四〇頁ほどの解説を編みました。いささかでも、先生を理解する上で、読者の参考情報になれば幸いです。オリジナル版の十冊を全三巻に纏めた次第ですが、原装は極力活かしましたのでご安心ください。洒落た試みとしては、慶應のスクール・カラー（三色旗）のブルー・レッド・アンド・ブルーの紐三本を「葉」（しおり）として付け読書の便を計りました。簡単に云えば、常備の紐状の葉でございます。できるだけ、原装の雰囲気・環境のなかで愛読して行くことが、最も望まれる姿だと思います。そうした研究・教育のインフラ造りは、私共の主張であり主義であり夢であります。「永久保存版」の理想を掲げて企画・実行いたしました。

先生が天に逝かれたのが一九〇一年二月で満六十六歳でした。今や日本人の平均寿命は飛躍的に延びました。小生でさえ古希の旅路を越えました。この御手紙では先生亡き後の慶應義塾や日本の国情等々を綴り、最後に小生の自己紹介をも兼ねた内容としたいと思います。というのも、慶應義塾は一私学の粋をはるかに超え、日本は「極東の島国」のイメージを脱し、産業・



社会・文化を中心に世界を先導する立場に成長しました。いわば、国造りに一定の成功を収めたが故に、幾多の課題と困難を背負っています。それでも、慶應義塾は一五〇周年記念祭を前後して教育設備と環境を改善・充実に、『福澤諭吉事典』や『慶應義塾史事典』を記念出版し、アメリカのニューヨーク州にはニューヨーク慶應学院（一九九〇年創立・英名：Keio Academy of New York）を創設して、伝統と精神を継承し、未来を先導すべく躍進中でございます。大学部門はキャンパスが六、学部、十四研究科（大学院）の規模に達し、高校五、中学三、小学校一校という規模になっております。充実した海外交流プログラムが盛んで、これは慶應義塾の特色のひとつとなっております。

謹んでお伝えいたします。先生のお葬式は、お約束通りそれは質素に執り行われました。が、会葬者は有に一万五千を越え行列の先頭が麻布山に至りし頃、漸く最後の列が三田の山を出た程だったと、歴史に記録されました。先生が逝かれて数年後に明治時代は終わり、時代は大正、昭和、平成と流れております。この間、日本は台湾・朝鮮半島・中国大陸等に介入し、植民地経営と戦争状態が相次ぎました。日清戦争に続いて日露戦争にも大勝利したものの、その後の第二次世界大戦で日本は米國と真正面から衝突し、一九四五年に至って軍事・外交に惨敗してしまいました。先生には勝敗の行くところが簡単にお解かりだったことでしょう。原子爆弾と云う核兵器も広島と長崎に世界ではじめて投下され、この新型爆弾によって甚大な被害と多数の死傷者が出たものです。この年を境に日本の政治・文化・社会は、戦前と戦後というように歴史や事象が区分されるようになり、明治の欽定憲法に代って、「日本国憲法」も米國の指導で新制定されました。総じて、先生の主張されてきた、民主・自由・平等・独立自尊が日常レベルの価値観として浮上しています。二〇一一年三月のこの時点で、未曾有の「東日本大震災」が発生し、これからは歴史や思想や年表が「災前」と「災後」というように区分されて行くかも知れません。大き過ぎたショックで、市民の生活や思考がその日を境に、激変・断絶してしまっただかの世相と景観です。

謹んで教育界に目を転じてみますと、後世のものは、先生と中村敬宇と新島襄を万世の三傑と呼んで尊敬しております。惟うに、その後を継いだ巨人として小泉信三君の名を挙げてもおかしくないと思います。換言すれば、小泉君こそは先生の精神を最も厳密に引き継いだ人物と云えましょう。「人好きなどころ」や、公的に窮しても「ユーモアを愛するところ」は、先生と瓜二つ。側近はそのように評価して参りました。親子して塾長を歴任した稀なケースですね。小泉君は先生の「天皇観」にも強い関心を寄せられ、或る論



評記事に所感を寄せた原稿と私信もありました。その原文・直筆は、只今小生が「宝物」として保管中です。モノも貴重品ですが、発信動機とその内容や宛先に共鳴いたします。大御所教授でありながら、たとえ相手が中学生であっても、時間的に間髪を入れずに丁寧な返信を寄せる思考構図が見られ、小生の胸を打ちます。小泉君は現平成天皇陛下の皇太子時代に、御進講役・東宮御教育常時参与でもありました。それより先、小泉君は戦前の慶應義塾々長時代の一九三六年八月に、世界一の名門ハーバード大学三〇〇年記念祭祝賀会に招待を受けて出席され、このときのホスト先への持ち寄りお土産がリヤカー一台分あったそうです。小泉君は同月二十一日午後横浜港から日本郵船会社の龍田丸で出帆されておられます。当然と云いましょうか、その中に御著『西洋事情』一式とその木版々木二枚が含まれておりました。後者は、『西洋事情』の巻の二、内容的には「亜米利加合衆国」の章節記述に相当する部分でした。これら『西洋事情』原本と版木は、七十五年を経た現在でも同大学図書館で「貴重書」に指定され大切に保管中でございます。小泉君の慧眼は今日でも随所に残り、また語り継がれ、二〇〇八年には生誕一二〇年記念の「小泉信三展」が慶應義塾図書館（現在では旧館と呼称・本来の図書館主要業務やサービスを新館に移す）等で開幕となりました。平成天皇、皇后両陛下も御観覧・鑑賞されました。昔の言葉で云えば、「天覧」いただきました。

先生の『西洋事情』と『学問のすすめ』は毎編の売り高が二十万部余と聞き及んでおります。この両者の間で一位になったり、逆転となったりして売れ行きと人気が今日に至っております。小生はこれまで御著の内容や影響力に魅了されて参りましたが、最近に至って、御著の出版が当時の真に落陽の「紙価」を高め、日本紙業界の浮上に繋がったという研究視点に巡り合い、これに注目しています。と申しますのも、昨今は先生の時代から見ると、様変わりとお申ししようか、出版界のみならず日本は人心も自然も大荒れです。でも、たとえ良貨は悪貨に駆逐されようとも、「良書」だけは確実に次世代に受け継がれると確信するようになりました。そういえば、日本では一九五八年から一万円の日本銀行券が発行され、その表には「聖徳太子」の肖像が刷り込まれました。その後、日本は高度経済成長時代を迎え、一九八四年から今度は先生の肖像が一万円紙幣に印刷され、今日も全国津々浦々で親しまれております。誰もが、競って何枚でも欲しがるとは、今日の日本銀行紙幣を眺め心底に感ずることは、一流の文化人の「息」の長さでございます。

謹んで惟うに、御著『西洋事情』は裏をかえせば、当時の『日本事情』を



観る鑑（かがみ）だと思えます。なにしろ、御著の内容の殆んどが当時日本では見られない事象であったわけですね。御著の中の「外国交際」の項目は楽しく拝読した次第です。先生が逝かれて間もない一九〇六年の一月に在米日本公館は、在米日本国大使館に昇格いたしました。ここに先生の言葉では「ミニストル」となっている大使（現在ではアンバサダー）と主要都市に「カシユル」があります（現在の総領事または領事）。斎藤博大使という稀代の外交官の雄弁も語り草であります。今や、御著等について調査や研究を進めてゆくと、先生が、自著が部数的には売れていても本当に読んで理解している人は案外少ない、という意味の言説を遺しております。この点から現在の世相を見るにつけ、地上の私共の現況はやや複雑でございます。しかしながら、一八七七年に御著『西洋事情』を拝読し、その上で先生との交際がはじめた塚本定次（郎）さんのことをご記憶でしょうか？この人の日記体の書類には「文久年中定次『西洋事情』を」拝読して益あり。其後明治十年初て謁す。此時先生四十四才定次五十二」。このように簡潔明解な記録がございます。この時以来、先生と塚本家（本家は滋賀県五個荘町・出自は甲府）の交際は続き、先生からの書簡が十数通現存しているといえますから、ほんとうに驚きでございます。定次さんが塚本商事（アパレル商社・文化九年開業・社歴約二〇〇年で現存）の二代目の社長に就任した際にも、先生は暖かいお祝いの書簡を送っていますし、定次さんに岩崎弥太郎（三菱の創立者）も紹介されています。塚本家には先生の写真も残っており、書き添え部分に明治三十三年（一九〇〇年）とあるそうですから、先生の逝かれた前の年という計算になります。写真の裏にある揮毫は、先生の「絶筆」ではないかと囁かれておりますが、先生のご健康はすでに芳しくなく、この頃の本文執筆は叶わず代筆であった、という観察もありました。定次さんは先生や勝海舟との交遊のなかに、経済の真のあり方、人としての生き様などを学びついで、堅実な経営姿勢を貫いていったのだと思います。塚本家の家訓・家法の内容は、とても重厚で行き届いたものでした。

いま、先生の書かれた書簡・葉書がもっぱらの評判です。日記や書簡は、基本的には公表を予期しないで書いたものですから、それだけにナマの情報・心情がしたためられております。研究者間で重視されている証言でございます。或る人は、先生の書かれた書簡は約一万通と見積もっております。そこまではゆかなくとも、平成十五年に『福澤論吉書簡集』（先生没後百年記念出版事業）という書物が発行されておまして、ここには二五六四通が収録されております。それ以降も先生の書簡類は、年平均十数通の割りて「新発見」



されている模様です。この中には、米国宛の書簡が数百点もあり、直接・間接に御著『西洋事情』に関わるものもすくなくないことを確認しました。同時に、各界人との交際の広さには圧倒されました。以上の保存・解読等の諸作業は、一九八三年に創設された慶應義塾大学内の「福沢研究センター」が担当しております。今回の御著復刻発行の段でも、このセンターにはたいへんお世話になった次第でございます。

謹んでご報告申し上げます。平成二十年十一月八日「慶應義塾創立一五〇年記念式典」が横浜市の日吉キャンパスで執り行われました。関係者約一万人が集まり、先生の提唱した「独立自尊」の精神を今後も貫くことを誓い合いました。天皇・皇后陛下も御出席され、お言葉がありましたので、別枠で本状にその全文を添えさせていただきます。どうぞ、ごゆっくりと御覧ください。奇遇にも、只今小生が住んでいるイリノイ州シカゴ市の郊外に、陛下とはクラス・メートの仲であった科学者が住んでおられ、親しく皇居や皇室のお話を伺った思いがあります。残念ながら、この方も今や長逝されてしまいました。

先生の文章と英文原著の照合勉強はなかなか面白いです。というより、訳出・新造語創出の際の苦汁が、伝わって参ります。『学問のすすめ』冒頭における「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」は、先生の永遠の言葉として今日まで伝わっております。これは、やはり、亜米利加の独立宣言書からヒントを得たのでしょうか？ 先生御自身は明言されておられませんが、「といへり」と文章が続いているので、〈アメリカ辺りでは広くそう云われている〉というのが真相でしょう。一七七六年七月四日の独立文書には、*We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are end-owned by their creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty, and the pursuit of Happiness.* と記されております。また、先生の「引用」を英語に反訳すれば、*It is said that Heaven does not create one man above others and another below. As born from Heaven, all men are equal, without any distinction between noble and base, high and low.* となりましょう。どうも、先生は、当時の社会的抵抗を甘受しながら、『西洋事情』と『学問のすすめ』などの御著を中心に、自然法上の人間の権利（基本的人權）や自由や平等を、何んとしても日本に伝えたかったように見受けられます。へこたれず、その主張精神が一貫していたことは、私どもの胸を強く打つところですね。というのは、この課題は『学問のすすめ』の冒頭有名句が発せられて約一四〇年も経った今、道程はまだ半ばと

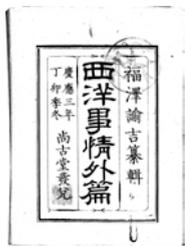


というのが「世界事情」でございます。

先生が、御著『西洋事情』をして福沢諭吉「訳編」とせずに「纂輯」としたのに、先生の知恵と時代色を感じます。今では、註記とか引用文献といわれるコラム情報ですが、この書物では例言・備考・小引の言葉で各冊の頭の方に出ておりますね。これらの情報により、現在では先生が本書纂輯の際に利用された原著（英文）はほぼ完全に解明されております。ただ、書名や個人名をそれらの発音に従いカタカナ表記（例えばオハヨ）、または漢字の当て字（例えば人名としての華盛頓）などなどに振り仮名とか原綴りがなく、読者は往生します。私の想像では、当時の一般の人々にも難しかったとおもわれ、現代の若者も判読は容易ではないのだと思います。生前、先生が危惧なされていたように、書物は飛ぶように売り捌けたが、解読できた人は、そう多くはなかったことでしょう。啓蒙書として申し分ない書物なので、ルビ（フリカナ）を付けて欲しかった、という発行当初の投稿書評を読んだこともあります。もっとも、先生は注意深かったと思います。「西班牙」や「閩龍」には、それぞれ「イスパニヤ」、「コロンピス」（コロンブスのこと）と、それら漢字の左横にフリカナを付けておりますね。この慣習は現在でも生きておりまして、難読・難意の言葉にはそれらの右側にフリカナを、あるいは続けて括弧を使用して、読者の手助けをしております。原綴りの併記は、特に学術書・学術論文において、必携事項となりました。今回、私は『西洋事情』の書名を「Things European and American」と訳しておきました。その根拠は、今日では西洋は「ヨーロッパ」でありまして、必ずしも「アメリカ」が入っていない点と、この書物の初編の巻之二が「亜米利加合衆国」を見事に理解した記述となっている点からです。先生は、多分、維新前後の世相を憚って、タイトルから「アメリカ」や「欧米」色を意識的に除いた事情もあったのだと思います。ただし、「Things Western (WIKIPEDIA 式) や Conditions in the West (ブリタニカ式)」という訳し方にも十分同調いたします。敢えて云えば、実学・科学技術・社会施設・機関・産業に力点をあげば「Things」が相応しく、政治・社会・文化に力点をあげば「Conditions」が適当でしょうね。

最後になりましたが、少々、自己紹介をしておきます。お許しください。小生は、上州群馬県の生まれです。慶應義塾大学を卒業した後約十年ほど慶應義塾図書館に奉職し、使命を得てインターン（研修生）としてメリーランド大学図書館に派遣されました。時に三十歳代初め、一九七四年の出来事でした。この年代前後の先生はといえば、幕末・明治維新に直面し蘭学塾を慶應義塾と命名したり、『西洋事情』を書き始めたりして本格的な啓蒙運動を開始した時代だったですね。私の場合は派遣期限が一年間でしたので、米回国





『西洋事情』外篇を束ねて売り捌いた際の包装紙表側。「慶應三年丁卯季冬」とあるから明治維新直前の出荷となった模様。



『西洋事情』初編 三 再刊の表紙・乱文字は組み合わせると「慶應義塾蔵版」となる。本文の「終」以降に印刷面なし。刊行年代不詳。金粉装。

奥泉栄三郎拝

慶應義塾大学文学部図書館学科第十三期生（昭和三十九年度（昭和四十年三月卒業）・慶應義塾大学法学部政治学科卒業生（昭和四十七年）・慶應義塾大学大学院図書館・情報学専攻課程修了生（昭和四十九年））

内旅行を含めて家族四人で楽しく過ごしました。ところが、こともあろうに、考えるところがあり現地で日本の職場を辞しアメリカにのこりました。しばらくしてメリーランド大学に専門職として本採用になり、ここでも約十年間頑張りました。幸い、それなりの成果を挙げました。「ブランゲ文庫」というものの整理に一応のレールを敷くことが出来、マイクロフィルムの形で、日本に里帰りさせ、学会に寄与することができました。紙屑らしきもの・謄写版出版物・原稿・校正刷り・英文翻訳もの、ペラペラもの、といった資料に、ライブラリアンといった立場から注目しました。この調査と作業が、その後の私の仕事上の人生の原点となったことはいまでもありません。さらにその後、この成績のお陰でシカゴ大学図書館に招聘され、今日に至っております。先生もお立ち寄りになったシカゴの街は、あの歴史上の「大火」から立ち上がり、文化・産業・学術の大都市として繁栄しております。私は勤務先のシカゴ大学（私立大学）を、私にポジティブな機会を与えてくれた機関として信奉しております。良い仕事を続けております。その一環に『初期在北米日本人の記録』の復刻出版事業も含まれ、その中に先生の名作『西洋事情』を加えることが出来ましたことは、まさに「恩寵の光」となりました。二〇〇四年の日米交流一五〇周年記念祭には外務大臣表彰も受けました。この光を心のなかの太陽として、自分を照らし、後輩を見守るべくこの先も頑張っております。何卒、御指導の程よろしくお願い申しあげます。

敬具

二〇一一年七月十一日



慶應義塾創立一五〇年に当たり、海外からの参列者も含む大勢の関係者と共に、この記念式典に臨むことを喜ばしく思います。慶應義塾はその創設者、福沢諭吉が今から一五〇年前の安政五年、一八五八年に江戸に蘭学塾を開いたことに始まりますが、この蘭学塾が開かれた一八五八年は、日本にとっても誠に重大な年でありました。それまで日本は、ほぼ二〇〇年にわたる鎖国政策を続けていました。が、嘉永六年、一八五三年に来航した米國艦隊のペリー提督との交渉の結果、もはやその政策を維持することができなくなり、米、英、仏、露、蘭の五か国と修好通商条約を結び、開国に向かって歩み出しました。一八五八年は、これらの条約を調印した年でありましたが、開国支持者と、それに反対する勢力が争う中で、厳しい出発でありました。このような困難な状況の中で、世界と情勢と文物を、オランダ語を通じて学んでいた人々が、開国した日本を支える上に、重要な役割を果たしました。申すまでもなく、福沢諭吉はその一人であり、著作物を通じ、また慶應義塾の教育を通して、わが国の人々に大きな影響を与えました。そうした中、日本は修好通商条約調印から三十一年にして、大日本帝國憲法を發布し、翌年には第一回帝國議會を開くまでに近代国家としての制度を整えるに至っております。長い平和な鎖国時代に国民が文化を享受し、国民の識字率も高い状態にあったとは申せ、このように短期間に国が発展した影には、当時の志ある人々が、いかばかり努力したかの思いを深くするのであります。慶應義塾は、今日まで、福沢諭吉の教えである「独立自尊」の精神の基に、我が国の各分野において、国の発展と国民の幸せに貢献する多くの人々を育て、また、文化の向上に寄与するとともに、外国人留学生の受入れなど国際交流にも意を用いてきました。今日、我が国は、幾多の課題に直面しており、今後も慶應義塾が、国の内外で活躍する人材を数多く育て、送り出すことを期待しています。創立一五〇年という、この喜ぶべき節目の年に当たり、慶應義塾と我が国の歴史を併せて顧み、塾の関係者が、これからの日々歩みにおいても、教育に、研究に、更なる力を尽くされることを願い、私のお祝いの言葉といたします。

〈天皇陛下のおことば〉慶應義塾創立一五〇年記念式典、平成二〇年十一月八日(土)・慶應義塾大学日吉キャンパス

本稿執筆にあたって利用した参考文献および情報

朝日新聞データベース聞蔵Ⅱビジュアル・読売新聞データベースヨミダス歴史館・雑誌記事索引データベース集成・「福翁は筆まめにござ候——残る書簡二五〇〇通、公平無私な人柄浮き彫り」(坂井達朗・『日本経済新聞』一九九九年十二月十四日)・「家法に映る福沢諭吉の心——近江商人の旧家に残る書簡・写真」(藤堂泰脩・『日本経済新聞』一九九四年三月九日)・「福沢諭吉の教え(遠みち近みち)」(森一夫・『日本経済新聞』二〇〇八年五月十八日)・「ユーモアの人、論吉」(福沢武・『福澤手帖』福沢研究センター刊・第一四六号・二〇一〇年九月)・「小泉信三の時代」(写真集・『週刊新潮』二〇〇八年五月)・『西洋事情』初版・「福沢諭吉関係新資料紹介」(福沢諭吉書簡)・『近代日本研究』福沢研究センター刊・第二十六巻・二〇〇九年度・二〇一〇年二月)・『晩年の福澤諭吉——福澤書簡に見る日清戦役の世情と「老余の煩悩」——』(小室正紀／松崎一(共案)・慶應義塾経済学会、経済学会ブックレット・第七号・二〇〇五年十月三十一日)・「Of the Absolute Rights of Individuals」Fukuzawa on Blackstone. By Albert M. Graig.『近代日本研究』福沢研究センター刊・第二十六巻・二〇〇九年度・二〇一〇年二月(pp.1250(21)230)・その他の英文関連書

★慶應義塾の慣わしにより、福沢先生以外の塾関係者は原則的に「君」をもって敬意を表しました。「福澤」と「福沢」表記は、できるだけ原文中心主義で使い分けました。